

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 7 日現在

機関番号：13301

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15H03263

研究課題名(和文) 日本海に沈む文化遺産探査

研究課題名(英文) Research of Cultural relics sunk to the bottom of Japan Sea

研究代表者

佐々木 達夫 (SASAKI, TATSUO)

金沢大学・その他部局等・名誉教授

研究者番号：60111754

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 11,800,000円

研究成果の概要(和文)：日本海に沈む文化遺産を発見し、その歴史的意義を研究するため、海底探査と海揚がり品を調査した。主な探査海域は新潟県上越市名立沖7kmで150mの海底、石川県輪島市鹿磯港である。名立沖海底でソナー探査し海底地形図を作成し、地点を絞って海底ビデオ撮影を行い、海底状況が把握できた。鹿磯港では江戸時代文献に記載される沈没船関連遺物を探し撮影したが、厚い砂堆積と港建設工事のため発見できなかった。

海揚がり品調査は北海道から壱岐対馬の間の本州日本海沿岸が主な調査地域である。各地で陶磁器や錨などが引き揚げられ、資料館や個人が保管していた。写真撮影と実測図作成を行い、各地の研究者と資料を共有した。

研究成果の概要(英文)：In order to discover the cultural heritage sinking in the Sea of Japan, and to study its historical significance, we conducted a seabed exploration and a survey of sunken relics. The seabed exploration area is 150 meters of sea floor about 7 km off Joetsu city, and Kaiso port in Wajima city. On the Off Nadachi seabed, we created a wide range of seabed topographic maps by sonar exploration, narrowed down the spot and took the seabed video, and we were able to grasp the situation of the seabed. I searched for relics related to the sunken ship described in the Edo period literature at Kaiso port, but I could not find them due to thick sand accumulation. The area of survey of undersea relics was the Japan Sea coast from Hokkaido to Tsushima, where ceramics and anchors were withdrawn in various places, stored by museums and individuals. We took photos and made drawings of them, and shared historical materials with researchers of the regions.

研究分野：考古学

キーワード：日本海海底 文化遺産 海揚がり陶磁器

1. 研究開始当初の背景

本州や道南の日本海沿岸の遺跡から出土した陶磁器等を用いて、研究代表者は日本海交易の考古学研究を1970年代の大学院生時代から実施してきた。同時に日本海沿岸の港町踏査を断続的に実施していた。海岸に近い陸上の都市遺跡や港町遺跡から発見される古代中世の陶磁器の多くが、日本海の交易によって運送されたものと想像することは容易なことであっても、それを実証する研究は水中考古学による成果が得にくいために停滞しがちであった。

漁船が底引き網漁によって海底から陶磁器などの文化財を偶然に引掛けることは半世紀以上前から知られており、その潜在的な資料的価値も評価されていた。実際に網に掛かる陶磁器などの漁師にとっての漁獲ではない邪魔物は、その場で海に廃棄されることが多かったと聞いているが、その一部は港まで運ばれることがあった。漁師が引き揚げた陶磁器などに関心をもった地元研究者や古文化財・骨董愛好者が各地にいた。彼らや漁師は海揚がり品を個人で所有したり、他人に譲ったり、骨董品として販売したりしたが、各地の歴史民俗資料館に海揚がり品として保管されることもあった。

長い年月をかけて、しだいに増加していった海揚がり資料から、海底に沈む船及び積み荷の具体的な姿や沈んでいた地点が絞り込めるようになった。海底の地点はすべて漁師の記憶によるもので、底引き網を長い距離引くために、狭い範囲を推定することには限界があるものの、いくつかの地点に集約している状況が明らかになってきた。魚探の精度が上がり、最近では海上の船の位置も正確に記録されるようになった。船の位置と海底の底引き網の位置は異なり、どの地点で底引き網に文化財が引っ掛かったか、そうしたズレがかなりあることも否定できない。そうした状況でも一定の地点に海揚がり品の位置が推定可能となってきたのである。

金沢大学考古学研究室に拠点を置いて活動した日本海域水中考古学会がすでに実施した海揚がり陶磁器等に関する漁協や各地教育委員会への聞き取り調査やアンケート調査、海揚がり品の資料的価値の講演会等による周知化、その歴史的意義の評価を、研究代表者たちも論文等や随時公開してきた講演会等で指摘し、海の文化財に関する情報公開を行ってきた。

2. 研究の目的

日本海の本州沿岸の海岸踏査と漁船底引き網による海揚がり品の調査成果を主要な研究基盤として、海底に沈む船及び積み荷の状況をより具体的に描き出すことが研究目的である。

今回は海底に沈んだ文化財の状態をより具体的に視覚化・資料化するため、100~200mほどのいわゆる深海における潜水ロボッ

トカメラによる海底探査を実施した。これに加えて、資料館等に保管される海揚がり品を用いて、日本海域地域間交流史の実証的研究を進めることも研究目的の一つである。

3. 研究の方法

海上を船で航行中に嵐などに遭遇して積荷や船そのものが海底に沈むことがあり、その痕跡が海底に残ると想像できる。能登半島及び佐渡島と本州の間の佐渡海峡という二地域を主要な調査拠点として、海底の調査を海底探査業者やその地域で漁を行う漁師と共同で進める。

新潟県上越市名立沖7kmの海底150m地点はこれまでに珠洲焼などが多く引き揚げられた地点であることを、地域漁師の話などから確認した。引揚げ品は壺や甕、播鉢が多いが、その作られた年代は同じ時期であるものが多く、沈没船に積まれたままの状態で沈んでいたことを想像することもできた。当初はそのような状態で沈んでいたとしても、実際には長期にわたる底引き網で海底の物資は散乱してしまったと想像される。

この地域を中心にソナー探査による海底地形測量を行った。次いでロボットカメラによる海底状況のビデオ撮影を実施した。さらに漁船を利用して魚探による海底地形の起伏などを確認した。こうした情報から海底の状態が以前よりも高い精度で推測できるようになった。人間が潜ることの出来ない範囲の深海と呼ばれる海底の情報は、日本海では考古学にとって非常に稀な映像となった。こうした調査に必要な船は地域漁協を通して借りることが要求され、漁協の都合が最優先され、併せて天気等の自然条件に振り回されることもあった。

石川県輪島市門前町の鹿磯港付近は、江戸時代文献に難破船が沈んでいることが記録されている。積荷の多くは沈没当時の村人が潜って回収したが、板石などの多くは海底に沈んだままになっていた。比較的浅い地点のため空気ポンペを背負って潜水調査を実施し、目視による海底の観察と写真撮影を行い、併せて海底をカメラによってビデオ撮影し、沈んだ文化財を探した。

今までにないこうした新企画プロジェクトに加えて、従来から継続している個人蔵及び資料館等の海揚がり品の調査も各地域で実施した。

4. 研究成果

海は広い。そのなかで、文化財の探査は砂浜の砂の中に埋もれた数点の小さな物を探すようなものと例えられる。それでも、海底に沈む物がどのような地形・場所に残っていたかが推測できる情報を得ることができた。名立沖から底引き網で引き揚げられた珠洲焼壺甕や播鉢は、岩陰に横たわるように残っていたと長く推定されていた。これは引揚げ当時の漁船員から地元研究者が聞き取りし

たことであり、それを基に海底に沈んだ珠洲焼の推定図面も作成された。これまでは海底に沈んでいた状態を推定復元できる資料として、名立沖の資料は日本海で唯一の例であった。しかし、今回の調査で岩陰を作り出す大岩は存在していないことが判明した。すでに底引き網で大岩さえが破壊された可能性も否定できないが、海底で溝状に浅く凹む地点に陶磁器などが落ち込んだのであろうと推定できた。日本海の沿岸は沈降しており、陸上に現れていたころの自然地形が残されていたためと推定している。

海揚がり品でもっとも多いのは陶磁器であった。これは焼かれたために海の中でも腐食しないためであり、交易船に積まれたものが陶磁器を主体としていたわけではない。一般には生活用品の砂糖、塩、米などの食品、綿花、綿織物など衣類、瓦や石材・木材などを中心に、さまざまな物資が運ばれ販売されていたことが文献資料から知られている。

海域の違いで、底引き網で揚がる陶磁器の種類や年代が異なることも、日本海各地の資料を比較することで推定できるようになった。名立沖とその周辺のタラバと呼ばれる地域で発見された陶磁器は、須恵器、珠洲焼、越前焼が多い。ただ、壊れやすい縄文土器や弥生土器も稀だが引き揚げられ、また江戸時代の質の良い伊万里焼の染付皿も引き揚げられて黒部市美術館に保管されている。近世陶磁器の破片は海岸に多く打ち上げられているが、船から海底に沈んだものと、陸上の生活用品が割れて捨てられ川で海に流れ、再び海から海岸に打ち寄せられたものがある。かなり多くの方が海岸散歩で収集している大量の陶磁器片の大部分は、生活用品が浜に再打ち上げされたものが大半を占めている。そのなかで、海底に沈んだ船に伴う可能性がある砂浜打ち上げ品も確認されている。

底引き網に掛かって陸まで漁師が運んできたものは特殊な例であったと言えるが、こういう状況を集約してみると、どのような種類が陸まで持ち帰る対象となったか、漁師による選択が働いていたことも否定できない。最近では骨董品として高価で取引されることがあるが、陸に持ち帰るのは骨董の価値の高騰による影響も大きいと思われる。陸上で発見されることが稀な種類や器形の陶磁器も海揚がり品に含まれることがあり、展覧会に展示したこともある。陸上では使用中に割れて捨てられるものが、海底では割れずにそのまま沈んだものがあつたためであろう。それが我々の調査中に骨董市場に販売されてしまったものもあり、地域行政の文化財に関する指導方針等が問題になることもある。

最近の底引き網は大きな岩でも破壊するほど網素材が強くなり、破壊力は大きくなったと言う。陸地で例えると、古墳群のなかにブルドーザーを縦横無尽に走らせるのに似ている状況である。海底の自然地形破壊と沈んでいる文化財そのものの破壊は、底引き網

漁が行われているほぼすべての地域で進行済と思われる。破壊されているという事実の認識とそれに対する保存に関する指導方針を行政が示すことも必要となっている。

底引き網漁が行われていない海域では、海揚がり品がきわめて少ない。そのためどのような文化財が沈んでいるかを知る手がかりが非常に少ない。空気ポンペを背負って浅い海岸の沿岸を目視する調査を我々も島根県や石川県などで行ったが、その成果は少数の陶磁器片を確認する程度である。常に砂が物を覆うため、海底に沈んだ物があつても、水中から見ることは難しい状況である。

漁師の海底破壊行動の結果のみを研究に利用するのではなく、研究面を重視した地道な非破壊の海底調査を継続して行うことが必要である。調査には船を借り宿に泊まるだけでも財政的な支出が多く、陸上の考古学調査よりも財政面で制約が多い場合がある。

今回の日本海における海底の文化財と海揚がり品の調査は、そうした研究中心の調査例の一つとなるものであつた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 0 件)

〔学会発表〕(計 0 件)

〔図書〕(計 0 件)

〔その他〕

調査状況とその成果は、テレビや新聞で随時公表している。名立沖調査はNHK新潟、NHKあさイチ、テレビ新潟、朝日新聞、新潟日報などで調査目的や経過を報道した。鹿嶋港の調査は北國新聞、北陸中日新聞を中心に調査開始の意義や成果を報道している。水中遺産が漁や観光で破壊されている状態は北陸中日新聞で紹介し、海底遺跡保護の必要性を述べた。併せて、金沢大学公開講座や日本海域水中考古学会の研究会・講演会で海揚がり品の情報と歴史的価値を社会に公開してきた。

2018 年中に日本海沿岸調査の成果を含む海の文化に関する研究成果を、単行本として刊行する予定である。

6. 研究組織

(1)研究代表者

佐々木 達夫 (SASAKI tatsuo)
金沢大学・その他部局等・名誉教授
研究者番号：60111754

(2)研究分担者

(3)連携研究者

岩淵 聡文 (IWABUCHI akifumi)

東京海洋大学・学術研究院・教授

研究者番号：80262335

(4)研究協力者

佐々木 花江 (SASAKI hanae)

寺崎 裕介 (TERASAKI yusuke)

田海 義正 (TOMI yoshimasa)

竹部 佑介 (TAKEBE yusuke)

小川 光彦 (OGAWA mitsuhiko)